
海賊船でハロウィーンパーティー。

久野千花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊船でハロウィーンぱーりい。

【Zコード】

Z0320

【作者名】

久野千花

【あらすじ】

さて、誰が生き残るのでしょうか？

パーティーで、かわいく激しく、ぜんりょくで遊びまくる海賊たち + ちょっとROCK！

フック船長の一人称。

本編よりも、萌えを意識した企画ものー（本編を読んでなくとも大

丈夫）

本編「HANDLE my lover」(<http://drop>)

storybloq.com/

(前書き)

本編「H A N D l e m y l o v e」(<http://dropstory.blog80.fc2.com/>)のハロウィーン企画。

フック船長の一人称。

本編を読んでなくても大丈夫です

こんにちは

ジェイムズ・フックです。

H A N D l e
m y l o v e
を読んでいただきありがとうございます。

ちょうど、俺が登場してきたあたりですね。
船の乗組員たちもだいたい出そろいましたね。みんなけっこつ、
かわいいでしょう？

ところで、今日は、ハロウイン
うちの船では、毎年盛り上がるんですが、みなさんはいかが
ですか？

俺の方は、うちの子たちが悪ノリしないように気をつけなくちゃ
なあ、なんて思っています。

今、カボチャのタルト食べてんすけび、すん“じ”おいしいですこれ。

じーん
よし、紅茶いれよ。う。

「フック船長———！」

背後の扉が勢いよくあきました。だいたい、じつこいつが、邪魔されるんです。お決まり。

「何してんすかーー！」

「ん、ハロウイーンだから『メント』求められてるんだよー」と言いながら振り返ると、うわわわわわーー！

「リアム、お前、変だぞー！顔…顔はどうこつたんだー！」

「！」ですよ。」

ぱいっとリアムの顔が出てきました。風船みたいに膨らんだ首のない胴体の、胸の真ん中から。

「なにそれ！？」

「フック船長、今日はハロウイーンですよ。」

「知ってる、だからなんなのそれ！？」

「言つたじやないです。今年のハロウイーンは、船中でコスプレして騎馬戦バトルロワイアルです！」

「コスプレっていうか、着ぐるみに近いぞ」

「細かいことはいいんですね」

「はあ。そうですか。勝手にやれよ。座我はするなよ。」

「いやもつ、怪我人出でます」

「え！？」

「マストに突き刺さった奴もいますし」

紅茶のカツプをおいて、窓にかけよつて外を見ると、一番高いマストに誰かの体が突き刺さっています（汗）。

顎の下から頭を貫通して、ぐわおぐわお。ぐわおぐわぐわお、巨 大な、ピンクのクマが揺れていました。

そのクマにしがみついている、小さな青いクマも見えます。

「ま、着ぐるみ部分に刺さつてるだけですけど。」

「ジンジャーと蒼太…だよな」

あ、本篇では乗組員の名前は出てこないんですね。

でも、まあ、いいですよね。特別編ですから、これ。

「そうです。けつこひ、ねばつたんですけど、やっぱあいつらまだ若いですねー。甘かつたですねー。」

リアムは大して年も変わらないのに、先輩顔をして言っています。

「はあー」

俺としてはため息が出ました。また、今年も始まりやつたみたいですね。

「ところで、船長、相談なんんですけど。」

「なんなの、やな予感。」

「実は、今年、”あの人”が初めて参戦してるんですよ

「だれ？」

「料理長です」

まさか！だつて、行事ごとの船員たちのバカ騒ぎに、俺と料理長だけは参加しないでお昼寝してゐる側だったのに。
なぜ今年のハロウィーンに限つて？

「船長、覚えてますか、今年の勝者の景品」

「ああ。”次の目的地の港を自由に決められる権利”…あつ。」

料理長は、常常、口癖のように、”いつか氷河でロックを飲むのが夢”だつて…

「そ、うなんですよ、料理長、本氣です。」

「本氣か？」

「大まじです。俺たちこのままじゃ殲滅させられます」

この船の中で、生まれた時からずっと海で生きてきた生粋の海賊

は、料理長だけだ。

奴が本気になつたら、うちの子たちがかなわないのは仕方がないこと…リアムが一刻もおしい、というようになります。

「このままじゃ、俺たち北極行きになります

「俺はやだぞ。寒いの嫌い。それにだいたい、この船には氷河を割つて進む装備なんてないっての。」

「料理長がそんなことくらいで納得するわけないです泣

俺は、ヤなものは絶対やつてきつぱりしてるとです。

譲れないものは譲れないし。通すところは通さないと。

「むこうの馬は？」

「レオと、カグヤですね」

「じゃあ、お前ら俺につけ

「ういつす　ww

リアムとノエルの双子が俺の馬。

俺は、上着を脱きました。絶対、奴の思ひどおりさせません。

「じゃあ、船長、このクジ引いてください。」

「はあ？」

リアムが、立ちあがつた俺に、変なビニール袋を差し出します。

「ルールですから。」

「はあ。」

俺は、一枚引きだしました。ノエルが俺からクジを受け取り、開きます。そして、

「…いまいち。船長、もう一度。」

俺は、もう一枚引出しました。ノエルが同じく。

「…もういつかい、いいですか。」

もう一枚。ノエル。

「んー…

「なんなんだよ」

俺はイラついてきました。

「いや、船長こはゞのコスプレがいいかなって。」

「は？」

「コスプレで騎馬戦、ガルールなんで。」

「ビーでもいいだろ」

「ダメです！」

そう言つノエルは、黒猫の耳とシッポがついていました。

「じゃあ、お前が適当に決めろよ」

「はい。では、これとこれ、どっちかいいですか。」

そういうノエルに、リアムが

「あ、結構いいじゃん。」

などと言つています。ノエルがせじだしてきました2枚のクジの紙には、

「ウエディングドレス（血痕つき）」、

「セーラー服（ロングスカート+眼帯）」

と書いてありました。

「はあ！？」

「船長決めてくださいーー俺だって猫耳コスなんですょーーーー（恥）

」

じゃあ、といつて俺は指差す。
セーラー服だろ、せめて。

いちおづ、おれも、海賊である前にセーラーだし。（と無理やりなつとく。）

それから、これもいちおづ、聞いておひづ。
「他に聞いておいたほうがいいルールある？」

リアムがいつ。

「負けたら、一日ふんどしで過ります。」

「じゃあ、勝つ。」

俺は言つ。

甲板に出たら、ふんどし決定な仲間たちが、体に痣をつくった痛々しい姿で倒れていた。

けれども、馬に乗った俺を見ると、おおおーと歓声をあげて起き上がり、手を叩いて迎えた。

俺は髪をかきあげた。

長いスカートが風にぱたぱたとはためく。

正面から来るのは、同じく優秀な馬に乗った、あいつだ。

なんだか、殺し屋みたいな格好してやがる。

「ゴルゴですって」

俺の馬が答えた。

相手も相当な気迫だ。簡単には勝てなそうだな。つたく、お前はおとなしくケーキ作つてればいいのに。

「なあ馬、一つ聞いていいか。」

「なんでしょう。」

「お前ら、実は、俺と料理長の一騎打ちが見たかっただけなんじやないの。」

二騎の周りには、あつというまに人だかりができる、いけいけなどといつ声も聞こえてくる。

「『』名答です みんな、めっちゃ盛り上がります 」

……つたく。

だが、俺は勝つ。

あいつがこの船に乗ってるのは、あいつが俺には勝てないからな

んだぜ。

次の港は、俺が決める、いつも通りな！！

あいつが剣を抜いたので、俺も抜いた。

はーん！この俺に向かって二刀流で来るとはね！……かんけーね

一けど！

「行くぜっ」

(後書き)

ところわけで、明日に続く！

といいたいけど、続きません

でも、フック船長が勝ちますよ

作者が保障します

なぜなら、この船で一番我儘なのは、実はフック船長だからです

ふふふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320j/>

海賊船でハロウィーンぱーりい。

2011年11月12日20時41分発行